

東庄町の子安塔

藤由美

一 子安塔とは

「子安塔」とは、子授け・安産・子供の健やかな成育を祈願するために、「子安講」などに集うムラの女性たちが造立した石塔や石祠をいう。その多くは「子安像」、即ち母性を明らかにした主尊（神仏）が子を抱く像が刻まれてある。仏典などの儀軌にはないオリジナルな像容で、この子安像を刻んだ石仏・石祠・石碑などの石塔を「子安像塔」、また「子安明神」や「子安観音」など「子安」の銘のみで像のない石祠・石碑も含め子安信仰関連の石塔をすべて「子安塔」とよぶ。いずれも江戸時代の地域の民俗信仰に由来する石造物である。

江戸初期から中期にかけては、如意輪観音像と主尊とする十九夜塔全盛期で、子安塔の建立は少ない。またその時期の子安塔には、「子安大明神」などの文字銘を刻む石祠が約三割あり、月待供養と並行して、子安信仰が神社祭祀を基盤に成立していたことがうかがえる。その後江戸後期からは、月待塔に代わって子安塔が急速に増え、現代まで北総におけるその数は一三〇基に達している。

千葉県最古の子安塔は、上総の袖ヶ浦市百目木子安神社の元禄四年（一六九一）の子安像塔である。

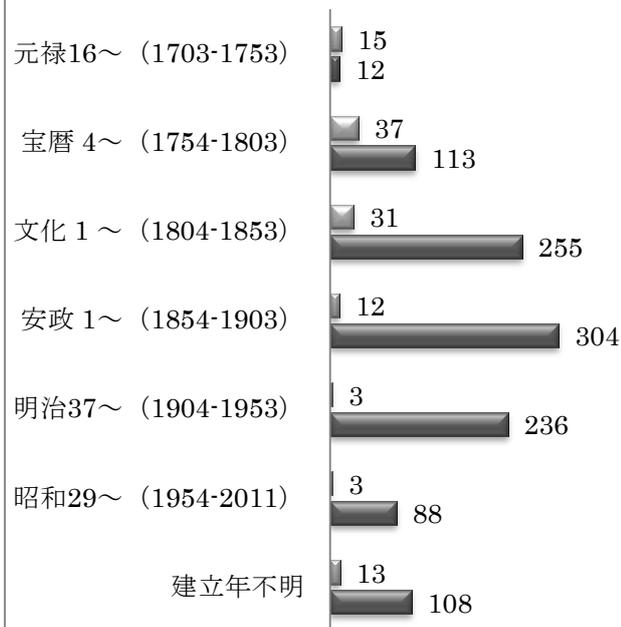
神社祭祀の石祠の中に、主尊名を表す「子安大明神」の文字と観世音菩薩を表す「サ」の梵字、の銘を刻み、神仏習合を忍ばせる。また子安像の像容は、和風の衣をまとい、胸元に抱く子のほか肩にも幼子を伴う二児配置の構図である。（下図）



百目木子安神社 (1691)

北総の子安塔数の推移

- 文字のみの子安石塔・石祠
- 子安像塔数 (墓標仏を含む)



印旛沼周辺では酒々井町尾上神社の享保十八年（一七三三）「子安大明神」銘の立像をはじめとして、百目木子安神社石祠の二児配置などの特徴を継承する石祠・石塔や、如意輪観音像に赤子を抱かせた十九夜塔などが元文年間から現れ始める。

香取地方での子安像塔の初出は、旧小見川町虫幡の日向山薬師堂の光背型石塔で、「奉待八日講中」「元文六年三月（一七四一）の銘があり、主尊の像は輪王坐で子を抱く。（下図）

銘文中の「八日講」は、出羽三山信仰の講で、弘法大師が湯殿山を開基した大同元年四月八日に因む「八日」を縁日とする湯殿講に由来するといわれる。



虫幡日向山薬師堂 (1741)

香取地方の江戸中期の子安像塔



窪野谷 妙見神社
(1787)



窪野谷 墓地 (1788)



小南仲宿 普賢院
(1793)



東和田青年館
(1794)



旧山田町大角稻荷神社 (1787)



香取市虫幡薬師堂 (1788)



神崎町大興福寺 (1788)



香取市虫幡地福院 (1793)

この日向山薬師堂には、貞享四年（一六八七）の大日如来像を中心に、四基の子安像塔と念仏講の聖観音坐像一基が並ぶ。江戸初期からのこの地域の湯殿山信仰が、十九夜念仏や子安信仰と不可分であったことを物語る石塔群であり、その子安像の像容は、いずれも中央の大日如来像に類似した正面を向いた姿勢を特徴とする。

江戸中期の東総の子安像塔は、印旛沼周辺の上体を傾けて子を抱く像容と異なり、結跏趺坐または輪王坐の正面向きのスタイルが主流で、子供も乳飲み子ではなく、幼児のように正面を向き合掌、または未敷蓮華を持つ像が多い。（上図）

東庄町では天明七年（一七八七）から享和三年（一八〇三）までの江戸中期に八基の子安像塔の造立があるが、寛政九年の東和田青年館の像などを除き、窪野谷の天明七年・八年（一七八七・一七八八）、小南の寛政五年・六年（一七九三・一七九四）の子安像など、いずれも主尊が正面向きの像容である。また窪野谷の天明八年の子安塔は、十五夜と十九夜の月待塔でもある。なお、そのほか、中期では子安地藏塔が一基ある。

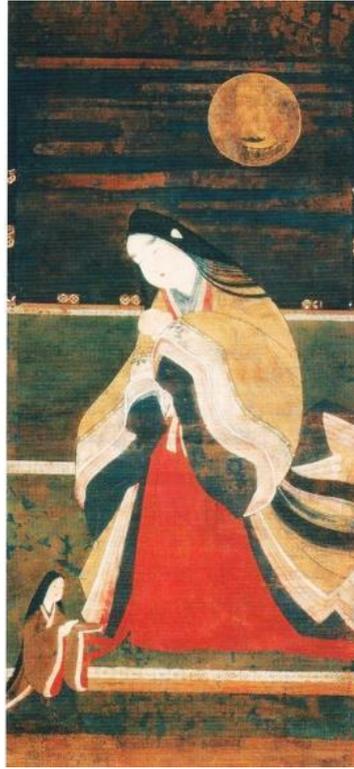
江戸後期に入ると、東庄町だけでも子安石祠を含め、十三基の子安塔が造立される。同時に、如意輪観音を主尊とする十九夜塔などの月待塔の造立が香取地方から姿を消し、東庄町では女人講の造立する石塔はすべて子安塔となる。さらに近代以降の東庄町の子安塔は二三基を数え、そのほとんどが子安像塔である。

また年不明の子安塔が十基あり、うち三基は平山の瀧神社の子安堂内の丸彫像である。丸彫像は、講の記念碑という性格より礼拝対象の本尊としての扱いが多く、そのため年銘を欠くものが多い。無年銘の瀧神社の丸彫像三基は、おそらく近代以降の作であろう。

二 神道の女神を祀る子安塔

東庄町の幕末期の子安塔で特異な像容は、大友天満神社の安政二年（一八五五）銘の女神像碑である。一・四メートルの平石に、線彫りのような薄い浮彫で、平安朝の女房装束で子を抱く横向きの立ち姿、左下にはさらに二児がまつわり、上部には宮殿を思わせる唐破風と簾、下部に纏縷縁の厚畳が描かれている。

女房姿で横向き立ち姿で子を抱く姿の像は、隣村の窪野谷字平台の妙見神社にもある。紀年銘を欠く光背型の肉厚の彫りであるが、大友天満神社のスタイルとよく似ていて、おそらく同時期の造立であろう。この二基の像は、吉野水分（みくまり）神社の南北朝時代の絹本着色画像「子守明神像」によく類似する。



吉野水分神社「子守明神像」（南北朝期）



大友天満神社安政 2 年（1855）

二〇一三年四月東京国立博物館での「国宝大神社展」に展示された吉野水分神社の「子守明神像」は、小桂と思われる女房装束で、右向きにうつむくように抱いた赤子を見つめる立ち姿の大和絵風の画像で、背景に御簾や畳、月のような円形の中には胎蔵界大日如来をあらわす種字「アーク」が、下には侍女らしき女人が小さく描かれている。

吉野水分神社は、本来、流水とその分配をつかさどる水分神五柱を祀るが、後世「みくまり」が訛って「みこもり」となり、子育ての神「子守明神」として信仰され、本居宣長も、両親がこの子守明神へ祈願して授けられたという。またこの神社の「木造玉依姫命坐像」は、平安時代の姫をモデルにした珍しい女神像彫刻で、建長三年（一二五）の墨書があり、国宝に指定されている。

東庄町は古代から東国支配の拠点であり、また中世は千葉氏の一族東氏の根拠地で、その鎮守の東大社は、吉野水分神社祭神の一柱と同じ玉依姫尊を祀っている。

江戸時代は小藩や旗本の領地が入りまじり、博徒の横行もあったが、学問も盛んで、江戸後期には平田篤胤が逗留していた。幕末期、このような神道色の強い子守明神像が子安観音像に代わって出現した背景として、東大社を中心に国学が隆盛し、それに伴って子守明神の絵姿の請来とこれをモデルにした子安像塔の造立があったのではないかと推定される。



窪野谷妙見神社（年銘なし）

神道色の強い子安像塔では、他に諏訪神社（笹川い）子安堂の作例がある。（本報告書「東庄町の石造物概要」に写真あり）垂髪で鎧姿と思われる女神が赤子を抱く像容で、この女神像は、神崎町植房の宇迦神社の子安塔（左図）の像容に類似する。



神崎町植房宇迦神社
(1787)

「子安大明神」及び「天保四年」（一八三三年）の銘がある神崎町宇迦神社子安塔の像は、垂髪で弓矢を背負い衣の下に鎧を着用する姿で、神功皇后像を連想させる像容である。陣中で応神天皇を安産したという記紀神話の神功皇后の姿は、安産祈願の奉納絵馬や五月幟、神社彫刻に江戸期から多くみられるが、皇后は子を抱かず、武内宿禰が子を抱いて侍る姿とともに描かれる。諏訪神社と宇迦神社の二基の子安塔で女神自ら抱く姿に表現されているのは、近世の伝統的な子安像の像容への適用例として興味深い。

その他、石出の林福寺の年不詳の子安塔も、垂髪に衣を着重ねた子安像が刻まれている。旧山田町にも同じような像容の子安塔があり、以上のような神道系の子安像は香取地方独特の子安塔と思われる。

三 昭和初期のモダンな助産婦奉納の子安塔

稲荷入の観音様墓地にある子安塔の像は、乳を吸う子供の姿勢などやや稚拙な不自然さがあるが、長い髪が印象的なモダンな美しい像である。この子安塔は、銘文から、稲荷入の高木幸三郎の長女で助産婦の「か祢」が昭和七年（一九三二）に奉納した子安塔で、か祢は、昭和

三年、香取市（旧小見川町）龍谷の伊藤三代治と結婚したことがわかる。

この像と近似した子安塔は、旧小見川町の龍谷柴蓋山円珠院跡にもあり、年銘を欠くが、「小見川町竜谷伊藤か祢 助産婦」の奉納となっている。

伊藤か祢が、実家と嫁ぎ先の両地区に同じ時期、助産婦としてお産にかかわった母子の健康、あるいは産死者の菩提を祈り奉納した子安塔であろう。

この像容と同じ子安塔は、香取市（旧小見川町）善光寺境内の石塔群の中にもあり、大正十三年（一九二四）銘が見とれる。また香取市（旧山田町）田部西雲寺の昭和二年（一九二七）銘の子安塔の像も類似の像容である。

【参考資料】

- 『小見川の石造物（西地区）』小見川史談会 二〇〇九
- 『国宝 大神社展 図録』東京国立博物館 二〇一三
- 『房総の石仏百選』房総石造文化財研究会たけしま出版 一九九九
- 拙著「北総の子安像塔の系譜」江戸時代中期におけるその出現と成立について」『房総の石仏二〇号』房総石造文化財研究会 二〇一〇
- 拙書「北総の子安像塔」江戸時代後期（文化）天保期の展開について」『房総の石仏二二号』房総石造文化財研究会 二〇一一
- 拙書「北総の子安像塔」江戸時代末期から現代までの様相について」『房総の石仏二三号』房総石造文化財研究会 二〇一二



旧小見川町龍谷円珠院跡（年銘なし）



稲荷入の観音様墓地
(1932)